

【京都府青少年育成協会会長賞】

「最近の言葉事情 ～便利な言葉への依存～」

京都府立洛北高等学校附属中学校 3年

木下理彩



美しい景色を見て——すごい。
面白い映画を観て——すごかったよ。
上手な歌を聴いて——すごいなあ。
テストの最高点を知って——すごっ。

最近の人々、特に若い世代の私たちは、どんな状況にも対応できる便利な言葉を使いすぎているのではないかと思う。その便利な言葉の一つが「すごい」だ。「すごい」は、さまざまな場面で自分の感情を表現したり、相づちを打ったりするときによく使われる。また、近頃では、「やばい」の存在感も強い。振り返ってみると、私の日常会話や見聞きする言葉は、「すごい」や「やばい」であふれているように感じる。

以前、私は友達と、学校では「すごい」と「やばい」を使ってはいけないというゲームをしたことがある。すると、何回もこれらの言葉を使いそうになり、自分がどれほどこれらの言葉に頼っていたのかということに改めて気付いた。また、その場に合った代用できる他の言葉を探してみたり、知っているのに普段はあまり使わない言葉を使ってみたりする良い機会にもなった。

では、これらの便利な言葉を使うことに、何か問題があるのだろうか。私は、これまでの経験から、三つの問題点を実感した。

一つ目は、語彙力の低下だ。「すごい」や「やばい」は、どんな場面でも使うことができると思います。万能な言葉だ。しかし、その万能さに依存してしまうと、何でもこれらの言葉で表現しようとするようになる。例えば、カレーを食べたとする。そのおいしさを表現するとき、「スパイスが利いていて絶品」「コクがあってまろやか」など、いろいろな言い回しがある。それらをすべて集約して、「このカレーやばい」で済ませてしまえば、おいしさを伝えるための多くの言葉の出番を奪ってしまいかねない。その結果、私たちの語彙力はどんどん低下してしまうのだ。

二つ目は、自分の伝えたいことが相手に的確に伝わらないということだ。ここでは映画を例にとってみよう。「あの映画はすごかった」と聞いたとき、どのような状況が想像できるだろうか。迫力満点だったのか。キャストが豪華だったのか。感動したのか。このように、いろいろな可能性が考えられる。そのため、結局何がどうなったのか相手はよくわからない。また、「あの映画はやばかった」ではどうだろうか。この場面、映画が良かったのか悪かったのかすらわからない。このように、曖昧で漠然とした言葉では、自分の感情や意見を正確に相手に伝えることは難しい。

三つ目は、相手にあまり良い印象を与えないということだ。社会人になると、仕事は人間関係において「印象」が大きな意味を持つようになると思う。「すごい」や「やばい」などを多用している人と、具体的に多様な言葉を使っている人とでは、どちらのほうが印象がよいらうか。当然、後者だろう。「すごい」や「やばい」を過剰に使えば、「言葉をあまり知らない人」と見なされるのも無理はない。

このように、「すごい」や「やばい」などの便利な言葉を必要以上に使うことは、自分にとっても、また相手にとっても、良いことではない。

そもそも、最近の私たちがこのような言葉を頻繁に使うようになったのはなぜだろうか。

私は、大きな原因として、ツイッターやラインなどに代表されるSNSの利用率が年々上昇していることが挙げられると思う。SNS上では、基本的に話し言葉でやり取りをする。また、語彙が豊富で知的な日本語を使うことではなく、早く発信することが望まれ、ある程度の内容が伝われば十分である。私自信も、単なる連絡手段としてではなく、友達とのコミュニケーションツールとして、しばしばラインを利用する。その時、私はいつも話し言葉ばかりを使っている。便利なツールにより一層便利さを求めて、便利な言葉で画面を埋め尽くしている。

時代とともに言葉も変化していくのは、当たり前のことである。毎年年末に新語が発表されているように、言葉は人々によって作られていくものである。しかし、始めからある言葉を使いこなすことが必要ではないかと思う。便利な言葉の虜になり、そのような言葉の「中毒」になってしまえば、その他の豊かな言葉を使わなくなり、もったいない。私たちは、便利な言葉に依存せず、今まで自分が使わなかった言葉を意識して使ってみるべきではないだろうか。